

SRID 会員紹介： 中沢賢治さん

私の略歴



私は雪深い新潟県長岡市で生まれました。1979年に東京大学法学部公法コースを卒業後、東京電力(株)燃料部で国際燃料情勢の調査、調達業務を経験。その間、1988年にペンシルベニア大学で行政学修士課程を修了しました。1991年に日本を離れ、国際連合工業開発機関

(UNIDO)に勤務することになり、ウィーン本部で、省エネルギー推進・産業振興業務を担当しました。東西冷戦後の旧ソ連圏の市場経済移行支援のために1991年に設立された欧州復興開発銀行(EBRD)に電力事業担当バンカーとして、1993年に入行。1999年より12年にわたりウズベキスタン、マケドニア、キルギス共和国の駐在事務所長として投融資活動の統括、国別ストラテジーの策定、政府当局との折衝を担当しました。2011年秋に東京駐在としてEBRDの対日マーケティングを担当し、2011年12月よりロンドン本部の中小企業支援チームで企業成長プログラム(EGP)の責任者となり現在に至っています。

従事した仕事の内容

国連工業開発機関(UNIDO) 時代



1992年、妻とウィーンの舞踏会にて

日本の電力会社で海外の燃料事情を調査し、国際ビジネスで活躍する人々を眺めているうちに、自分も外の世界を経験してみたいという気持ちが強くなっていました。1989年の夏の朝、新聞で外務省アソシエイト・エキスパートの募集を見つけました。これは日本政府が国際機関に2年間日本人を派遣するプログラムです。ウィーンに本部のあるUNIDOの省エネルギー・資源に関するプログラムに空席があり応募しました。UNIDOは開発途上国

の工業化促進のために技術援助を行う国連専門機関です。私が所属した環境調整ユニットは環境プログラムの実施に向けて、内外の関係部局を調整すると共に、1991年10月にコペンハーゲンで開かれた「環境と調和し持続可能な工業開発のための国際会議」の事務局でした。デンマーク政府から派遣されたニールセン大使を補佐し、さまざまな準備会議の議事録をとりまとめることなどが仕事でした。

この会議は 1992 年 6 月にリオデジャネイロで開かれた国連環境開発会議（アース・サミット）の準備会議としての性格を持つものであったため、リオの会議にも UNIDO 事務局の一員として参加することになりました。この時に会場で大来佐武郎先生や緒方貞子先生に新米の国連機関職員としてご挨拶させていただいたことは大きな励みとなりました。その後、大来先生の設立された SRID の海外会員となり今に至っています。

欧州復興開発銀行 (EBRD) 電力事業チーム時代

1994 年にプロジェクト・リーダーとして、アゼルバイジャンの水力発電所の改修工事を担当しました。プロジェクトの発掘から理事会承認を得るための最終報告まで、仕事のサイクルのすべてを責任者として担当しました。EBRD でリーダーとして責任を与えられた初めての経験でした。アゼルバイジャンの電力公社総裁とは、情報開示の必要性、電力事業の構造改革の方向性、将来の投資家誘致策などを話し合いました。発足して数年を経たばかりの EBRD に対してマスコミでその活動を批判するキャンペーンが行われるなど、EBRD が難しい状況を迎えていた頃でした。そうした中で自分にまかされた大きなインフラ・プロジェクトでした。これが調印に至り、英経済誌エコノミストの記事で EBRD の最近の活躍の例として言及された時は、とても嬉しかったのを覚えています。EBRD の投融资の決定に際しては、サウンド・バンキングの原則からみて優良案件であること、市場経済移行に向けての高い効果が期待できること、既存の諸機関と競合しないことについて厳しく審査されます。さらにすべての案件について環境への影響を評価し適切な対策をとることが承認の前提条件となります。EBRD が活動対象国の政府に融資を行う場合、国家保証が必要となりますが、この場合調達コストであるロンドン銀行間レート (LIBOR) に手数料として 1 % を上乗せしたものが利率となります。EBRD が民間企業に融資する場合には LIBOR にプロジェクトのリスクに応じたプレミアムを上乗せしたものが利率となります。民間の投資銀行がためらうような投資環境の国々では EBRD の利率は非常に魅力的ですが、他方で無償ないしそれに近い条件で活動する援助機関と比べれば割高感があることとなります。

欧州復興開発銀行 (EBRD) タシケント駐在事務所時代



1999 年クーラー総裁タシケント来訪

タシケントに赴任早々の 1999 年 5 月には第三代のホルスト・クーラー総裁 (独、1998-2000) のウズベキスタン訪問を、現地事務所長として準備しました。カリモフ大統領との会談の後、チムール帝国時代の古都サマルカンド訪ねました。クーラー総裁はその後、任期半ばで EBRD を離れ IMF 専務理事となり、その後ドイツ連邦共和国の大統領を務めました。第四代のジャン・ルミエール総裁 (仏、2000-2008)

は、中央アジア初の国際金融機関年次総会として注目された 2003 年の EBRD タシケント総会の準備から始まり、現地事務所長として話し合う機会も多かったのが印象に残っています。この総会をめぐるのは、EBRD がその定款に民主主義国支援条項を持つことが大きく報道されました。国際 NGO が「人権が十分に擁護されていない国の公式宣伝を許すべからず」として同総会開催を批判していました。総会直前の 4 月のタシケントで爆弾未遂騒ぎの後、理事会で急きょ総会をロンドンに変更すべしとの議論がなされると、総裁は「タシケント総会は人権を含む政策対話継続のために必要である」として自身の辞任をかけて理事会を説得しました。ルミエール総裁の在任中に地元の中小企業を直接支援するための ETC イニシアティブ (Early Transition Countries Initiative) がスタートし、「旧ソ連圏東方の後進地域で弾力的な活動をすべき」という EBRD の新戦略が始まりました。EBRD の技術協力活動が高く評価されるようになったのも、ETC イニシアティブの成功と関わっています。

欧州復興開発銀行 (EBRD) スコピエ・コソボ駐在事務所時代

2004 年秋にスコピエ事務所着任して間もなくの年明けに EBRD 主催での南東欧 (SEE) 地域経済セミナーが開催されました。SEE というのはこの地域をバルカンと呼ばない場合の呼称です。また“マケドニア”が国内憲法上の名前ですが、歴史的にマケドニア地方の中心は自分たちであったとするギリシャが反発し、国連での名称は“旧ユーゴ・マケドニア”のままであるなど、呼び方に気を使うことが当地の歴史の変遷と民族混在の状態を示しています。少数民族問題 (マケドニア人 65%、アルバニア人 25%他) を抱えたこの国は 2001 年の紛争を経て、複数民族の平和的共存のお手本ケースとなり西側諸国が支援しています。気候に恵まれ、食料品など物価が安いせいか、地元の人々の表情はゆったりとして見えます。マケドニアのお隣にある旧ユーゴのコソボも担当しました。コソボは 2008 年に独立を宣言するまで、国連 (UNMIK) の暫定統治下にありました。首都プリスチナを訪れ、UNMIK、コソボ暫定政府、地元銀行などの人々と情報交換を行い、地元銀行への融資、電力事業民営化プロジェクトを支援しました。

欧州復興開発銀行 (EBRD) ビシュケク駐在事務所時代



2011 年、キルギスの赤いケシの花

ビシュケクでは 2008 年の世界金融危機への対応に追われる形で、忙しい時期を過ごしました。モニタリングを強化する一方で、既に取り引のある地元銀行への支援を強化。危機対応で緊縮予算を組むキルギス政府への支援策として、世銀、EU、スイス政府などの無償援助を補完する形でキルギス南部基幹道路、首都ビシュケクの上水道事業に融資。先行きの不透明な不動産開発などへの融資を手控える一方、改修工事の資金が必要な板ガラス事業

などに対して迅速な追加融資を実施。ノンバンクのマイクロ金融機関に対して現地通貨建ての融資を導入。2009年は通常年の約6倍にあたる100億円近い融資額を達成しました。

2010年4月のキルギス政変の混乱時にはビシュケク事務所長として現地にとどまり関係者の安全確認と現場からの報告を続けました。4月7日水曜日の大統領官邸前での流血騒ぎの後で一晩は自宅で不安な夜を過ごしました。同日夜、大統領は出身地の南部ジャララバードに飛行機で逃れました。8日の木曜日に筆者の住む地区にデモ隊が押しかけたときには国連チームから緊急連絡が入り、妻を家から脱出させることができました。その夜から知人宅に避難しました。妻は出張者数名とともに10日土曜日にロンドンに避難しましたが、私は、街の様子が落ちつくのを待って12日の夜から自宅に戻り仕事を続けました。世銀・IMF・ADB・EBRDなどによる合同事態評価ミッションが5月から7月にかけて実施され、一連の対策会議にEBRDの事務所長として参加しました。暫定政権の財政状況、金融セクターの状況、産業への影響などに焦点を絞って評価を行いました。その結果が7月にビシュケクで開かれた支援国会議に報告され、暫定政府支援のための各国・機関による援助の具体策が検討されました。2011年5月の総裁のビシュケク訪問でオトンバエバ大統領、アタンバエフ首相との会見を準備したのがキルギスでの最後の仕事となりました。

仕事上の苦勞

国際機関で働き始めて、最も大変だったことは言葉です。英語圏での留学経験があったので、会議やレポート作成もなんとかできると思っていましたが、最初は大きなプレッシャーがありました。国際機関で働く際に、英語でのレポート作成能力とプレゼンテーション能力は必須です。幸か不幸か、世銀出身で人使いの荒いことで有名だった当時の上司は、私の作成したレポートにいちいちコメントを入れる人でした。自分のドラフト力が不足しているのかと最初は悩みました。ところがその後、ネイティブの同僚たちも同じ目にあっていることを知って気が楽になりました。この上司の指導の下で6年間を過ごした頃には、一人で仕事ができるようになっていました。EBRDの場合はロシア語圏の国が多いので、次のチャレンジはロシア語でした。途上国の勤務で現地の言葉がわからないで、通訳を待っていると交渉が不利になることもあります。私はロシア語の歌のCDを毎日聞き、ロシア語と日本語の両方の字幕付きの映画を繰り返し見ることで、会話の内容がだいたい理解できるようになりました。今はオーディオ・ブックなどが発達し、語学の苦勞は一昔前よりも軽減されてきています。

国際開発にどのように関わって来たか

さまざまな人や事柄に出会えることが開発関係の仕事に携わる者の大きな楽しみだと思います。サマルカンドの青タイルのモスクやブハラの子ナレット（尖塔）のことは本で読んだことがあるけれど、どこにあるか知らないという人は多いと

思います。ウズベキスタンに行って驚いたのが、イスラム文明にとって非常に重要なそれらの遺跡がそこにあることでした。キルギスの場合は、三蔵法師が書いた大唐西域記に出てくるイシク・クルという有名な湖があります。シルクロードを旅した作家井上靖が夢に見ながら訪問の叶わなかった湖です。中央アジアは日本人にとっては、とても不思議な場所です。自分の祖父母に似た顔立ちの人がたくさんいますので、自然とノスタルジックな気分になる一方で、いろいろな民族や文化が混在していますから、例えば遊牧民族系だったりすると、考え方は大きく異なります。何が似ていて、何が違うかを考えることは、自分がどういう人間なのかを考えるきっかけになりました。

ロシア語圏を主としてカバーする EBRD の仕事の副産物としてロシア映画、ロシア文学、ロシア歌曲などの壮大な世界を垣間見たことも大きな喜びでした。ドクトル・ジバゴの映画を見て、翻訳を読みました。いつの日か原典を自力で読めるようになるまでロシア語と付き合おうと思いました。先日の南ロシア出張でウクライナ国境に近い港町タガンログを訪問する機会があり、教科書として「子犬を連れて奥さん」「イオニッチ」を読んで以来気になっていたアントン・チャーホフの生家を訪ねました。ノーベル賞作家でパリで客死したイヴァン・ブーニンがチャーホフの評論を書いています。「暗い並木道」という作品集が気になる作家です。日本で加藤登紀子さんが歌ってヒットした「百万本のバラ」を歌ったアリヤ・ブガチョバ女史は心に染み入るような名曲をいくつも歌っています。歌を聞いたり、本を読んだりするたびに訪れた土地や、教えてくれた人々を思い出します。

私の生き方

広い世界を見てみたいという気持ちで日本を飛び出して以来、流されるまま生きてきたというのが正直なところですが。日本を離れて失ったものもあれば、新しく得たものもあります。このように不安定な日々の暮らしは、家族のサポートがなければ成り立ちません。11 年前にタシケントで新しい家族となった「ちび太とマッツ」の二匹の愛犬の存在は、夫婦にとって、なくてはならないものになりました。妻は青年海外協力隊員としてコロombo大学（スリランカ）に派遣された経験があり、ウィーンの JICA 事務所やロンドンの BBC 放送通訳などの仕事を通じて、私に影響を与え、私の生き方を強くサポートしてきた人ですが、さすがに日本を離れて 20 年以上経つと身体への負担が大きかったのか、去年は病に倒れてしまいました。闘病のため、仕事を離れて、一家で日本に帰りました。妻が小康状態を得てから、家族でロンドンに赴任し、ビシュケクに半年預けていた愛犬たちとの再会を果たすことができました。次の任地を求めて各地を流れていく生き方は家族のパートナーとしてのあり方が常に試される旅を続けているようなものです。